

# 東北大学の入学者選抜における男女差の様相

——選抜区分に着目して——

宮本 友弘, 林 如玉, 久保 沙織, 倉元 直樹, 長濱 裕幸 (東北大学)

本研究の目的は、東北大学における令和3年度～6年度の入学者選抜の実施状況等を選抜区分ごとに男女差という視点から分析し、女子学生の割合を高めるための知見を得ることであった。女子の全志願者及び全合格者に占める割合は約3割で推移したが、総合型選抜(AOⅡ,Ⅲ)が寄与した。また、AOⅡ,Ⅲで入学した女子は男子や一般選抜で入学した女子よりも入学後の成績が良好であり、優秀な女子学生の獲得につながっていた。加えて、対面オープンキャンパスへの参加が、入学学部等の志望を決定づける契機となっていた。以上から、現状の総合型選抜を一層改善することが重要であり、新たな選抜区分を設置することは急務ではないと考えられる。

## 1 問題と目的

現在、日本国内での4年制大学進学率は、男女ともに50%を超え、拮抗しつつある。しかしながら、いわゆる「難関大学」と称される大学、とくに理系分野では女子学生の割合が低いことが問題視されている。そして、大学入学者選抜においては、その解決に向けた取り組みが求められている。

例えば、毎年、文部科学省高等教育局長名で通知される「大学入学者選抜実施要項」においては、令和5年度(文部科学省,2022年6月3日)から、「第3入試方法」に「(5)多様な背景を持った者を対象とする選抜」という項目が追加された。そこでは、「家庭環境、居住地域、国籍、性別等の要因により進学機会の確保に困難があると認められる者その他各大学において入学者の多様性を確保する観点から対象になると考える者(例えば、理工系分野における女子等)を対象として、入学志願者の努力のプロセス、意欲、目的意識等を重視し、評価・判定する入試方法」とある。趣旨は入学者の多様性の確保ということであるが、「理工系分野における女子」と例示されているところに、上記した問題解決に強く動機づけられていることがうかがえる。こうした方針を受け、いくつかの大学ではいち早く、女子だけが受験できる、いわゆる「女子枠」という選抜区分を設置する動きを見せている。

東北大学においても、女子学生の割合を高めることは課題となっている。しかし、第一義的には、研究者の多様性を高め、男女共同・協働を実現することが目標となっている(東北大学,2022)。そもそも、東北大学は、建学の理念に「門戸開放」を掲げており、1913年に帝国大学として初めて3人の女性に入学を

許可した歴史がある。女性研究者を尊重する校風が根付いており、女性研究者を支援する環境整備に常に取り組んできた。反面、女子学生の割合を高めることについては、その重要性は認識されつつも、入試の具体的な制度設計という段階までには議論は熟していない。

さて、大学入試に関する女子研究としては、各大学の志願者や入学者を対象に当該大学の志望の時期と理由、情報収集活動などについて尋ね、男女差を検討するといったものが多かった(例えば、北澤ほか,2012;藤井,2017など)。そして、結果については入試制度の改善というよりは、入試広報活動にどう活用するかに主眼が置かれてきた。筆者らも(宮本ほか,2022)、同様の発想で取り組み、女子が本学を志望するにあたって対面オープンキャンパスの影響が大きいことや、受験決定の際、重視した相談相手として、女子では保護者や進路指導の先生の割合が男子よりも高いこと等を見出した。一方、最近では、伊佐(2021)のように、社会学的な観点から、女子の難関大学への進学率の低さの要因を抽出し、実証的に検討するような研究もみられるようになってきた。

以上を踏まえて、本研究では、東北大学の入学者選抜に関する各種資料をあらためて男女差という視点から分析してみたい。とくに、主な選抜区分に着目し、男女差の様相を比較する。これに基づき、女子学生の割合を高める上で、現状の入試制度はどうあるべきか、あるいは、新たな入試制度が必要であるかどうかを検討する。

具体的には、3つの資料を分析する。まず、客観的事実として入学者選抜の実施結果(志願者数、合格者数)である。対象とする期間は、大学入学共通テストが開始された令和3年度入試から令和6年度入試ま

での4年間とした。ただし、選抜区分は、総合型選抜のAO入試Ⅱ期とⅢ期<sup>1)</sup>、一般選抜前期日程と後期日程とし、定員が若干名もしくは少数の特別選抜は除外した。

また、合格者（入学者）の志望動機を探るために、毎年実施している新入学者を対象にしたアンケート（宮本ほか、2022）のいくつかの質問項目のデータを利用した。さらに、入学後の学修状況を検証するために、卒業までの累積GPAを算出し、それを使用した。

以上、3つの資料において、選抜区分ごとに男女差を中心に分析を行った。

## 2 入学者選抜の状況

### 2.1 志願者及び合格者の属性

表1に各年度における男女別の志願者及び合格者の人数と割合を示した。女子の割合をみると、いずれも令和4年以降はともに微増傾向にあるものの、ほぼ3割で推移している。ここでは、志願者の属性として、とくに入学者選抜に関連すると考えられる出身地域と現役・浪人別を取り上げた。

まず、出身地域別志願者における女子比率を算出した（表2）。東北地方がいずれの年度でも最も高く、4年間の平均は36.2%であった。次いで、年度によって多少の変動があるものの、北海道（平均31.0%）、中部（平均26.1%）、関東（平均23.4%）、近畿以西（平均22.0%）の順であった。また、男女別に合格者における出身地域の構成比を図1に示した。男子では関東地方（平均42.4%）がもっとも多く、次いで東北地方（平均30.4%）であったが、対照的に、女子では東北地方（平均43.6%）がもっとも多く、次いで関東地方（31.5%）であった。他の地方については男女でほぼ同程度であった。

次に志願者における現役生比率をみると（表3）、全体では7割以上が現役生であり、増加傾向にあった。男女別にみても増加傾向にあったが、4年間一貫して女子の方が男子よりも高く、約8割にのぼった。

### 2.2 選抜区分別の分析

まず、性別ごとに志願者及び合格者に占める各選抜区分の構成比を算出した。性別にかかわらず志願者（図2）、合格者（図3）ともに選抜区分の構成比は4年間を通してほぼ同程度であった。また、男女を比較すると、志願者、合格者ともに女子の方が男子よりも、AOⅡ、AOⅢの占める割合が多く、前期、後期の占める割合が少なかった。

次に、選抜区分ごとに志願者、合格者における女子

表1 各年度の男女別志願者及び合格者の人数（人）と割合（%）

			R3	R4	R5	R6
志願者	男子	人数	5,650	5,407	5,208	5,582
		%	73.2	73.0	70.5	69.9
	女子	人数	2,070	1,999	2,178	2,400
		%	26.8	27.0	29.5	30.1
	合計人数			7,720	7,406	7,386
合格者	男子	人数	1,786	1,803	1,759	1,767
		%	72.1	72.7	70.9	70.0
	女子	人数	690	678	723	756
		%	27.9	27.3	29.1	30.0
	合計人数			2,476	2,481	2,482

注) 特別選抜は除く

表2 地域別志願者における女子比率（%）

	R3	R4	R5	R6
北海道	29.5	31.1	25.8	36.7
東北	34.2	36.0	36.9	37.6
関東	22.6	20.5	24.4	25.9
中部	24.5	25.8	27.8	26.3
近畿以西	18.1	20.2	25.1	24.5
全体	26.9	27.0	29.6	30.1

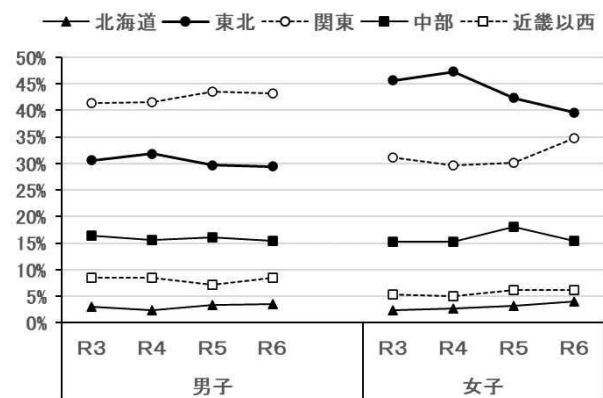


図1 男女別の合格者における出身地域の構成比

表3 男女別志願者における現役生比率（%）

	R3	R4	R5	R6
男子	72.1	73.1	73.2	75.9
女子	78.2	80.2	80.6	81.8
全体	73.6	74.8	75.2	77.5

比率を算出した(図4)。志願者、合格者ともに4年間で著しい変動はみられなかった。志願者では、すべての年度でAOⅡの割合が最も高く(平均43.7%)、次いで、AOⅢ(平均34.9%)、前期(平均27.0%)、後期(平均14.6%)の順であった。また、合格者では、各選抜区分の順位自体は志願者と同じであった。AOⅡは、志願者での割合よりも総じて上回り、とくに令和6年度は50.0%にのびた。AOⅢは毎年5%程度の幅で高下がみられた。前期、後期はともにすべての年度において志願者での割合を下回った。

### 2.3 学部系統別の分析

学部の系統による違いをみるために、10学部を大きく文系(文学部、教育学部、法学部、経済学部文系)、理系(経済学部理系、理学部、薬学部、工学部、農学部)、医療系(医学部、歯学部)の3つに分けた。なお、一般選抜後期日程は、実施学部が経済学部と理学部のみであること、定員がAOⅡ、AOⅢ、前期に比べて少なく、志願者倍率が著しく高いこと等、特殊事情を考慮して今後の分析から除外することとした。

図5～図7は、各学部系統において選抜区分ごとに志願者、合格者の女子比率を示したものである。まず、文系学部をみると(図5)、志願者ではAOⅡが6割を超え(平均63.8%)、AOⅢ(平均39.1%)、前期(平均35.6%)よりも著しく高かった。合格者ではAOⅡは7割(平均74.9%)を超えたが、AOⅢ(平均38.0%)、前期(平均36.2%)は志願者での割合と同程度あった。

次に、理系学部をみると(図6)、志願者ではAOⅡ(平均30.0%)が最も高かったが、AOⅢ(平均27.0%)も同程度あった。前期(平均18.3%)はそれらより低かった。合格者でも、AOⅡ(平均31.8%)、AOⅢ(平均24.3%)、前期(平均15.1%)の順であったが、志願者での割合よりもAOⅡは高かったが、AOⅢ、AOⅡは低かった。

また、医療系学部をみると(図7)、志願者ではAOⅡ(平均61.4%)、AOⅢ(平均52.9%)、前期(平均46.1%)の順であり、いずれも比較的高い割合であった。合格者でもAOⅡ(平均67.5%)、AOⅢ(平均61.4%)、前期(平均47.9%)の順であるが、いずれも、志願者での割合よりも高い。

以上、学部系統それぞれで固有の特徴がみられた。それらをより明確にするために、男女別に各選抜区分の合格率を算出し、両者の差を求めた(図8)。総じ

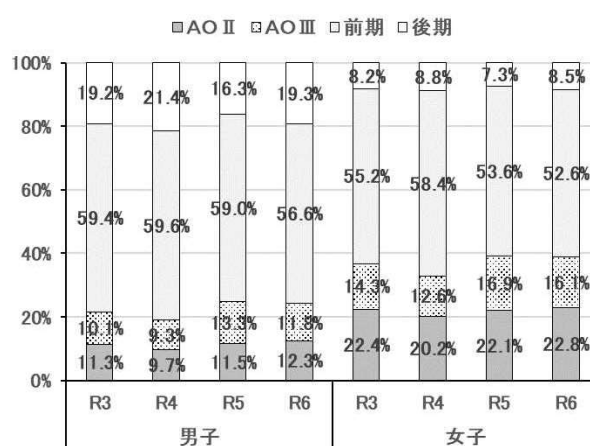


図2 男女別の志願者における選抜区分の構成比

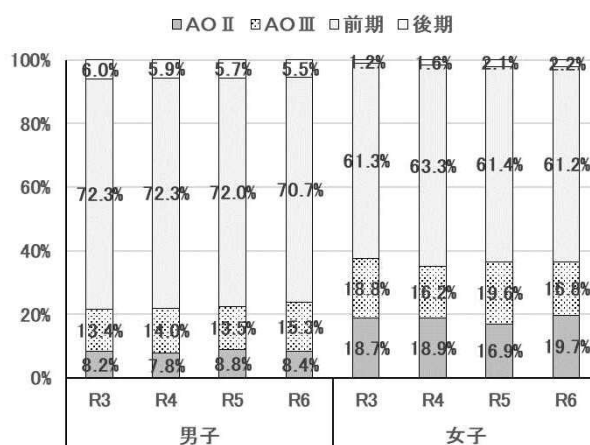


図3 男女別の合格者における選抜区分の構成比

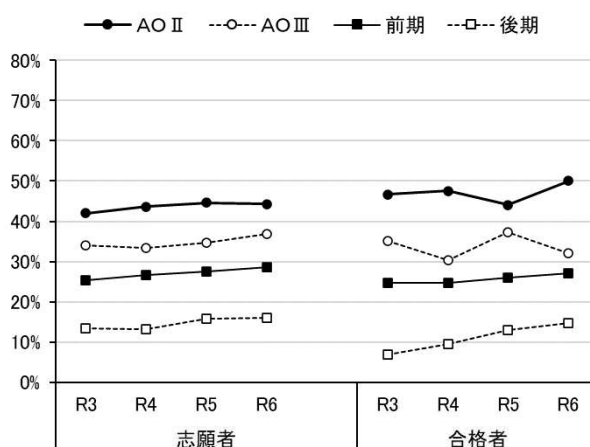


図4 選抜区分別の志願者及び合格者の女子比率

て、文系学部では女子のAOⅡの合格率が男子よりも高く、理系学部では女子のAOⅢ、前期の合格率が男子よりも低く、医療系学部ではすべての選抜区分で女子の合格率が男子よりも高いことが示された。

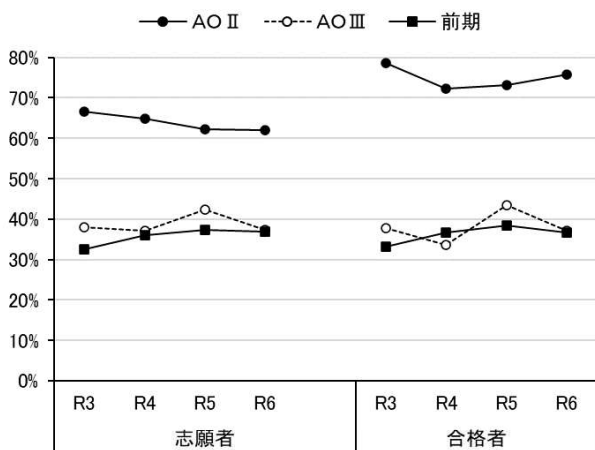


図5 文系学部における選抜区分別の志願者及び合格者の女子比率

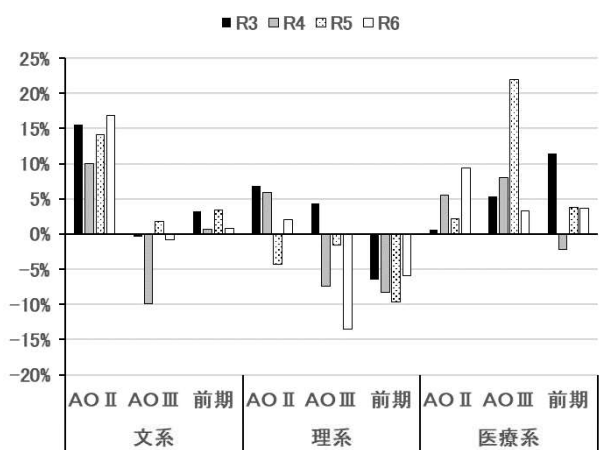


図8 各学部分類における選抜区分別の合格率 (%) の男女差 (女子の合格率-男子の合格率)

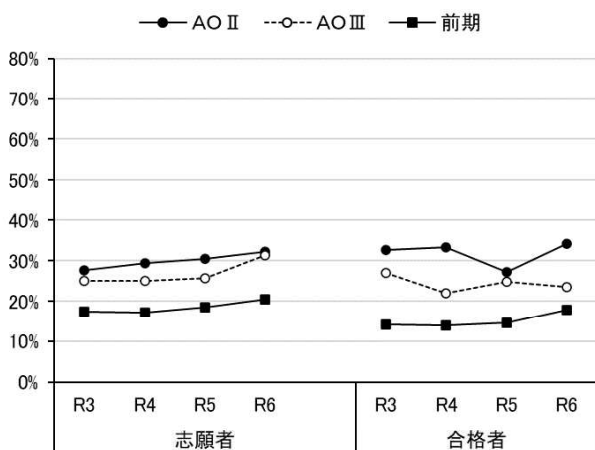


図6 理系学部における選抜区分別の志願者及び合格者の女子比率

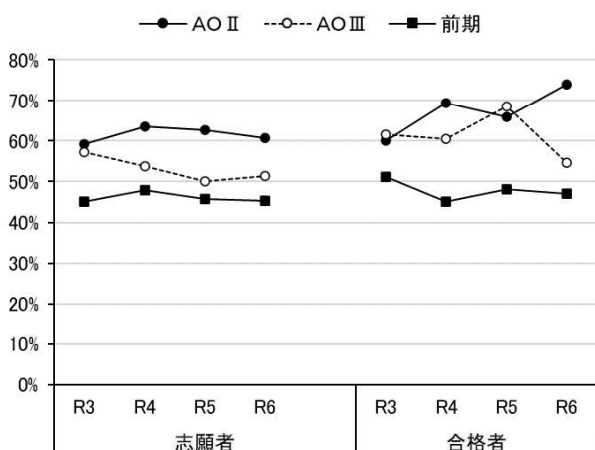


図7 医療系学部における選抜区分別の志願者及び合格者の女子比率

### 3 志望動機分析

志望動機に関する男女差を探るために、ここでは、東北大学で毎年実施している新入学者を対象にしたアンケート（詳しくは、宮本ほか、2022）から、2つの質問の結果を利用した。1つは、入学した学部等が第1志望かどうかについての質問であった。ただし、AO II、AO IIIでは第1志望であることが出願要件となっているので、前期のみを対象にした。

もう1つは、対面オープンキャンパスに関する質問（参加の有無、参加した学部等、入学した学部等の志望決定への影響度）であった。オープンキャンパスの参加が入学した学部等の志望決定にあたって重要であることが示されてきた（倉元ほか、2020）。しかし、これまで男女差については検討されてこなかった。

なお、令和6年度入学者対象のアンケートは、現時点では回収が終了していないため、令和3年度から令和5年度のデータだけを分析した。

#### 3.1 第1志望者の割合

表4は、前期で入学した学生において、学部系統別に入学した学部等が第1志望である者の割合を示したものである。文系学部、理系学部ではすべての年度で男女ともに約9割が第1志望者であり、男女差は5%以内で僅かであった。一方、医療系では、令和3年度、4年度は男性が9割弱であったが、女子は7割台と相対的に低い割合であった。令和5年度には男女ともに8割強となった。

#### 3.2 対面オープンキャンパスの影響

まず、対面オープンキャンパスの経験者数をみると（表5）、男女ともに減少傾向にあった。これは、新

表4 入学した学部等が第1志望の割合 (%)

		R3	R4	R5
文系	男子	94.8	94.3	94.3
	女子	91.2	93.7	93.9
理系	男子	89.6	89.5	88.4
	女子	86.9	86.7	92.9
医療系	男子	92.5	87.8	84.1
	女子	77.3	72.5	83.3

表5 男女別の対面オープンキャンパスの経験者数

		R3	R4	R5
男子	人数	715	443	303
	%	44.5	27.1	19.3
女子	人数	310	203	189
	%	47.5	31.3	28.0

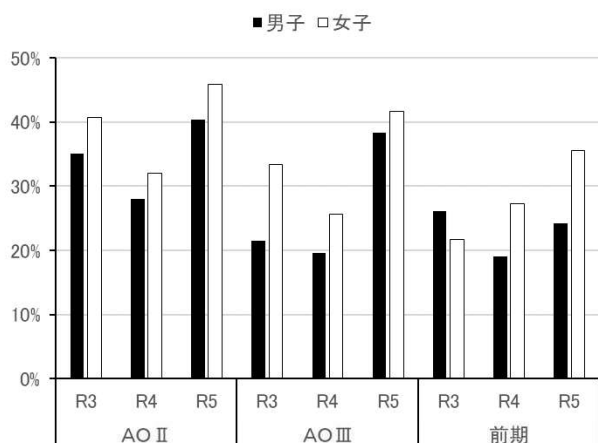


図9 各選抜区分における男女別の「決め手」率

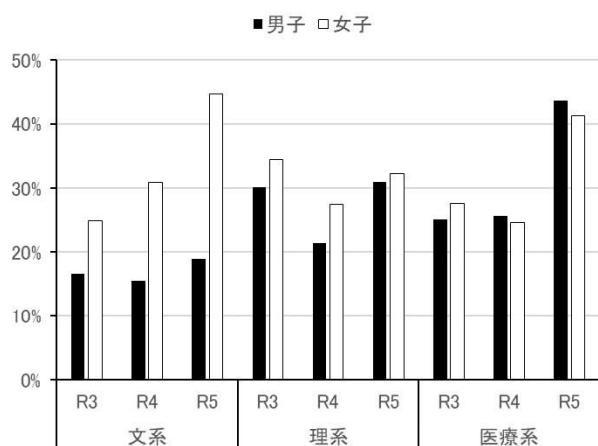


図10 各学部系統における男女別の「決め手」率

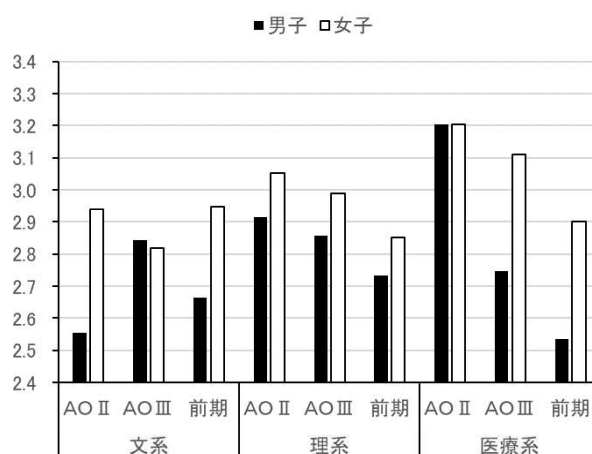


図11 各学部系統における選抜区分ごとの男女別 GPA (令和4年度卒業生)

型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、令和2年度、令和3年度の対面オープンキャンパスが中止となり、令和4年度は抽選制にして参加者を制限したためである。アンケートの回答者に占める割合は、一貫して女子の方が男子よりも高かった。

次に、入学した学部等のオープンキャンパスに参加した者のうち、当該学部等への志望決定の「決め手」と回答した者の割合を求めた。選抜区分別の結果をみると(図9)、令和3年度の前期以外は、すべて女子での割合の方が男子よりも高かった。

加えて、学部の系統別の結果をみると(図10)、文系学部では女子での割合が男子よりも高く、その差は、相対的に大きかった。理系学部でも、女子での割合が男子よりも高かった。一方、医療系では、男女それぞれの割合は拮抗しており、それらの差は3%以内で僅かであった。

#### 4 入学後の学修状況

選抜区分別の入学後の学修状況については、標準年限で卒業した者の累積 GPA を算出し、AO II、AO IIIが前期よりも高いことが公表されてきた(滝澤, 2022年2月10日)。ここでは、同様のデータを使って男女差を分析した。ただし、本研究の分析対象者は、もっとも早く入学した者でも令和3年度であり、現時点で卒業には至っていない。そこで、もっとも直近の卒業生でデータが整備されている令和元年度入学生について分析することとした。

図11は、学部系統ごとに選抜区分と性別による累積 GPA を示したものである。文系学部においては、AO II、前期では女子の方が男子も高かったが、AO

Ⅲでは同程度だった。理系学部では、いずれの選抜区分でも、女子の方が男子よりも高かった。医療系学部では、AOⅢ、前期で女子が男性よりも高かったが、AOⅡでは同程度であった。

## 5 考察

本研究の目的は、東北大学における入学者選抜に関する各種資料について、選抜区分ごとに男女差という視点から探索的に分析し、女子学生の割合を高めるための入試制度設計に関する知見を得ることであった。

令和3年度から令和6年度までの志願者及び合格者の全体的な状況からは、女子比率あるいは男女差に関しては大きな変動はなく、同程度の水準で推移していることが示唆された。女子の全志願者及び全合格者に占める割合は、微増傾向にあるものの、約3割で維持されていた。こうした女子の志願者層の特徴について、上記2~4での分析結果を踏まえてまとめると次の通りとなる。

まず、属性として出身地域は、地元の東北地方が約4割、関東地方が約3割を占めている。近年、新聞等で東北大学における地元からの入学者の減少が報じられることがあるが、女子の場合は必ずしも当てはまらないと考えられる。また、女子は男子に比べて現役生の割合が高い。伊佐(2021)は、難関大に進学する女子が男子に比べて少ない一因として女子の浪人選択率の低さを指摘しているが、それと整合する結果であろう。

選抜区分については、女子は男子に比べて、総じてAOⅡとAOⅢに志願する者が多く、合格する者の割合も高かった。本学における女子比率を維持してきた選抜区分はAOⅡとAOⅢであるといえる。また、入学後の学修状況からは、AOⅡ、AOⅢで入学した女子は男子よりも、さらには、前期で入学した女子よりも同等もしくはそれ以上の成績であることが示唆された。本学のAOⅡ、AOⅢでは、入学後の学修に必要な学力的側面についての評価を重視しているが、これらの選抜区分を経て入学した女子は、学修での遂行ポテンシャルが高いと考えられ、実際に、そうした実力が発揮されているようである。この意味で、単に人数の確保だけでなく、資質・能力の担保という点からもAOⅡ、AOⅢは機能しており、優秀な女子学生の獲得につながっているといえる。

加えて、女子は男子よりも積極的に対面オープンキャンパスに参加し、とくにAOⅡ、AOⅢで入学した者にとっては、本学を志望を決定づける契機となっていることが明らかになった。コロナ禍で参加機会が大

幅に減少されたにもかかわらず、対面オープンキャンパスはその機能を発揮し続けており、頑健な訴求力を持っていると考えられる。対面オープンキャンパスの地理的な参加しやすさが、女子志願者の出身地域の構成比率に影響している可能性もあろう。宮本ほか(2022)が、受験理由の自由記述に対するテキストマイニングから、女子が対面オープンキャンパスを通じて大学の魅力を感じ、自分の興味にあった学びができることを重視しているという仮説を生成したが、それが裏づけられたといえる。

一方、学部の系統別にみると、理系学部のAOⅢ及び前期において女子の合格率が男子よりも低いことが示唆された。女子比率を高める上では重要な課題であろう。AOⅢでは大学入学共通テストが課され、前期では加えて個別学力試験が課される。したがって、それらを構成する教科・科目に関する学力の問題ということにもなる。しかしながら、女子が理科系の教科・科目が不得意といった単純な話ではないことに留意する必要がある。学力的な側面を独自の筆記試験で評価するAOⅡでは、理系学部においても、総じて女子の合格率が高い。従来から、女子は志望時期が早いことが示されており(北澤ほか, 2012; 藤井, 2017)、より学力の高い層がAOⅡを志願し、合格した可能性も考えられる。

また、入学後の学修状況では、理系学部ではすべての選抜区分において、女子の方が男子よりも高いことにも注目する必要もあろう。この結果からは、東北大学では、入学後、理系女子の学修が促進される環境が整っていることが示唆される。仮に、いわゆる「女子枠」を設置しても、本学のように入学後の適切なフォローアップがなければ、女子が活躍できるという保証はないのではないだろうか。

以上、本学においては、総合型選抜が女子学生の比率の維持に寄与してきた。同選抜区分で入学した女子学生は、大学での学修状況も良好である。したがって、現状の総合型選抜を一層改善することが重要であろう。少なくとも「女子枠」といった新たな選抜区分を設置することは急務ではないと考えられる。

女子学生の割合を高めるためには、一般選抜の志願者、とくに理系学部において増やすことが必要であろう。そのための方策の1つとして、対面オープンキャンパスへの参加を促すことが有効であると考えられる。

なお、今回の分析では探索的であったため、いくつかの課題も残った。とくに、学部の系統分けにおいて、医学部医学科、医学部保健学科、歯学部を同じ医療系

としたが、女子が将来、医師・歯科医師を目指す場合と、それ以外の医療職を目指す場合では、進学先の選択方略が違うこと（伊佐, 2021）が示されており、適切ではなかった。この点と、理系学部的一般選抜における男女差等も含めて、さらに精査していく必要がある。

## 注

1) 東北大学のアドミッション・ポリシーでは、総合型選抜における学力については、一般選抜と同等以上の水準を求めており、AO入試Ⅱ期（11月）では個別の筆記試験、AO入試Ⅲ期（2月）では大学入学共通テストと個別の筆記試験（一部の学部等）を課している。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP21H04409 の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 藤井恒人 (2017). 「志望大学の認知, 志願確定と情報収集時期, 方法の関係—入学者アンケート分析より—」 『大学入試研究ジャーナル』 **27**, 103-108.
- 伊佐夏実 (2021). 「難関大に進学する女子はなぜ少ないのか—難関高校出身者に焦点をあてたジェンダーによる進路分化のメカニズム」 『教育社会学研究』 **109**, 5-27.
- 北澤武・渡辺美紀・上野淳 (2012). 「一般入試選抜を対象とした入学志願者の傾向分析—過去3年間の入学志願者アンケート調査分析から—」 『大学入試研究ジャーナル』 **12**, 163-171.
- 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・南紅玉 (2020). 「東北大学における入試広報活動の『これまで』と『これから』—頂点への軌跡からオンライン展開への挑戦へ—」 『教育情報学研究』 **19**, 55-69.
- 宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸 (2022). 「東北大学志望を促進する要因の検討—新入学者アンケートから—」 『大学入試研究ジャーナル』 **32**, 69-76.
- 文部科学省 (2022年6月3日). 「令和5年度大学入学者選抜実施要項」 文部科学省  
[https://www.mext.go.jp/content/20210617-mxt\\_daigakuc02-000010813\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210617-mxt_daigakuc02-000010813_1.pdf) (2024年4月25日)
- 滝澤博胤 (2022年2月10日). 「AO入学者の学業成績がいい理由」 朝日新聞 Adua  
<https://www.asahi.com/edua/article/14543703> (2024年4月25日)
- 東北大学 (2020). 国立大学法人東北大学 第4期中期目標・中期計画」 東北大学

<https://www.bureau.tohoku.ac.jp/kohyo/kicho/itiran2022.pdf>  
(2024年4月25日)